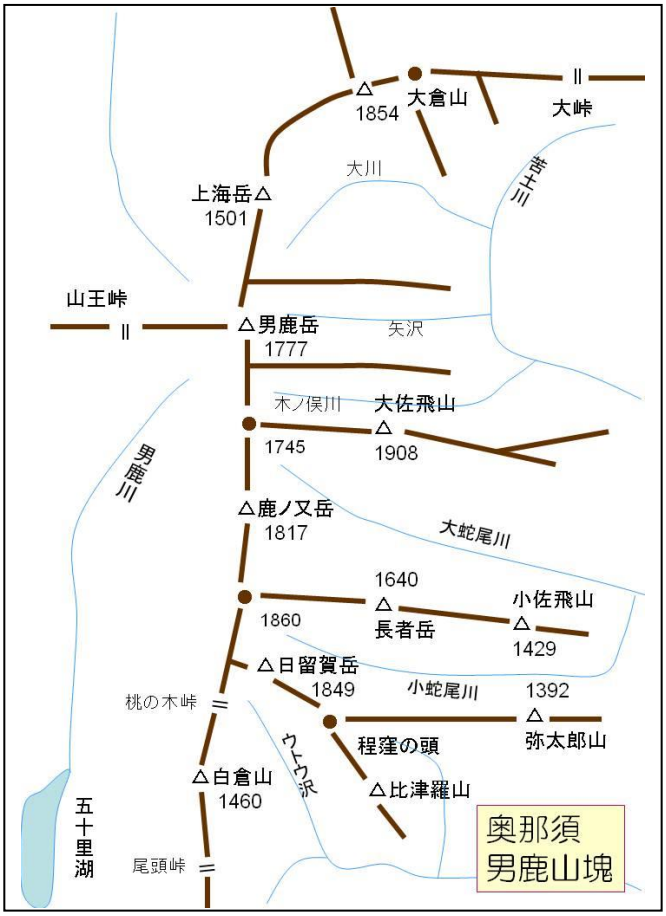
踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

奥那須	塩原から程窪の頭ピストン（日留賀岳をめざしたが）	No.062

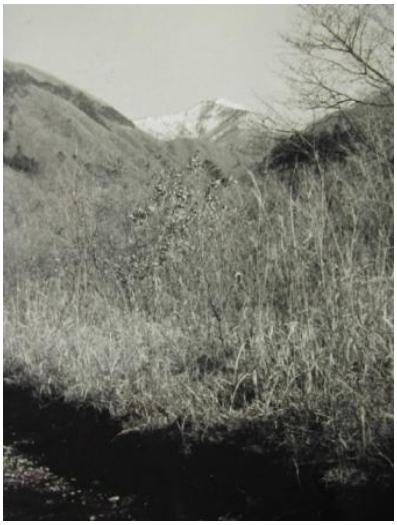


奥那須、男鹿、日留賀岳、これだけ言ってもピンと来る人は少ないだろう。那須といえば温泉地を、男鹿といえば秋田の男鹿を思い浮かべるのがせいぜいで、日留賀岳に至っては丹沢の蛭ケ岳ぐらいしか思い浮かばないのが普通である。いや、実にうれしい山だ。
何がうれしいか、誰も知らない山だということぐらいうれしいことはない。だが、ガイドブックにはちゃんと載っている。
（アルパインガイド「那須高原と塩原の山」）
この男鹿山塊は、那須の大峠から西南に延びる尾根を言う。那須の裏または奥であることから、奥那須、裏那須と呼ばれることが多い。
稜線は東北地方（福島県）と関東地方（栃木県）の境界線になっており、さらに先へたどると会津西街道の山王峠、荒海山、田代山、帝釈山。（ここらへ来ると「帝釈山塊」と名を変える）、黒岩山（ここらへ来ると奥鬼怒となる）。黒岩山で二股に分れて一方は南へ金精峠、日光白根、日光連山へ。他方はさらに西へ沼田街道の沼山峠、尾瀬沼を南に見て燧岳・・・・・はたまた奥利根水源そして上越国境へ。つまり関東平野の垣根につながっているということになる。
男鹿山塊もこの垣根のごく一部分にすぎない。高さという点では、2000mに満たない峰ばかりだが、ガイドブックと地図に首を突っ込んでいるうちに、いつしか頭から離れぬ存在になってしまった。
そして、今回目指す日留賀岳は 1848.8m、この山塊の最南端に位置し、最北端の大倉山とともに僅かではあるが登山路らしきものがあるとガイドブックに載っている。しかしどちらにしても薮のうるさい季節に登る山ではなく、積雪期に登るのがよさそうである。夏に登るなら沢を遡行して入る山らしい。
この山塊は「わらじの仲間」が相当歩いているようだが、彼らの記録を見ても真夏にせっせと薮をこいだと言う話はまったく聞かない。私が四月を選んだのもそんなところにある。
最南端のこの山は、塩原温泉のすぐ裏手にあたり、その僅かなる道も塩原温泉を起点にしている。

昭和41年4月2日
遅番の勤務を終えて、そのまま上野駅へ直行。満月がこうこうと照る中、22時40分発青森行に乗り込む。列車はほぼ満員に近いが、山登りをするスタイルをしている人の姿は見えない。

昭和41年4月3日（晴）
西那須野2時42分着。シュラフを出して待合室のベンチで仮眠。5時30分に起床。
朝食のチーズサンドイッチをせかせか食べ、6時15分発の国鉄バスに乗車。
塩原古町7時05分着、朝の塩原温泉はまったく静か、箒川の流れだけが威勢がいい。7時10分出発。
4月になったもののまだまだ春は遠い感じがする。源三窟を左手に見送り、八幡橋のたもとで鬼怒川に抜ける日塩道路と分かれ、木の葉石をさして北へ。

踏　み　跡　＜　My　mountains　＞



シラン沢の奥に真っ白い雪の衣を纏ったピラミッド型の山が頭を出している。あれが日留賀岳だ!!大分遠い、けっこう雪がある。次から次へと独り言が出てくる。（右写真）
比津羅山を巻いて北のコルに出るまでは道はきちんとついており、ゆるやかにしかも暖かな陽射しを受けて登って行く。時折振り返ると鶏頂山、釈迦ケ岳から八方ケ原までが絶えることなく視界に入ってくる。
比津羅山の北コル、ここで初めて雪が出てくる。そして、西に会津の山が、中でも雪をたらふく食らいこんだ荒海山と安ケ森山が目立つ。南の眺めは、鶏頂山とその横に日光の表尾根が。
11時、雪田の下で食事をした後日向ぼっこ（と言っても途中から昼寝になってしまったが）。時々起き上がってグリセードの練習をしたりののんびりした食休みを二時間もとり、再び出発したのは12時40分。
ここからはもう今までのような道はない。しばらくはわずかに踏み跡があったが、すぐに笹の中の残雪に消されてしまった。判断がしやすいように、地図上の登山道の破線を参考にしながら 「稜」 を選んでの歩き。雪があるため、邪魔なクマザサが気にならず薮こぎも苦にならない。
高度 1200m を越す頃から雪は深くなり、一尺に近いところも出てきた。おまけに昼下がりの雪は水っぽく歩きにくいことこの上なし。
測量用の大きな板が Y 字型に置かれた 1512mの独標、膝下まで没する雪の上に石楠花の葉が顔を出している。程窪の頭と名が付いているピーク、14時18分。（右下写真：程窪ノ頭から日留賀岳を望む）

日留賀岳は目の前にどかりと腰を下ろして、古い相撲の雑誌で見た「玉椿の前の男女ノ川」のごとく。そして手前の深く切れ落ちた鞍部が、目指す日留賀岳をいっそう遠く感じさせる。時刻はもう14時18分。目前に迫っている正三角形の頂は、今日のところは眺めるのみであきらめざるを得ない。必ずや来るであろう 「頂上を踏む日」 のために、じっくり眼球に焼き付けておく。
目の前の小蛇尾川の対岸に座す長者岳も 1640mながら堂々たる容姿である。日留賀岳方面ばかり見つめていた眼をぐるりと回してみると、北北西に白く威厳のある山並みは飯豊連峰だろうか。西に秘境会津の桧枝岐方面、白衣を纏った会津駒ケ岳がひときわ目立つ。南西の日光連山、南の鶏頂山も勿論のこと。
来年のいつ頃だろうか、日留賀岳の雪の中に立つ自分の姿が、想像のスクリーンに映し出されてきた。
雪を割ってみると石楠花は固いながらも蕾みをつけている。もう春なのだ。たとえ雪に埋もれてはいても、植物はもう春の装いの準備をしている。
未練は尽きぬが又の日を期して往路を戻ることにする。14時50分下山開始、朝登った道をなぞるように塩原温泉へ一目散。塩原古町17時05分着、箒川の流れを聞きながら北に目をやると、ピラミッド型の日留賀岳は白く遠くドッシリと座している。その姿は決して私を嘲笑などしていない。むしろ、「今年は駄目だったが又来年」 と意気込んでいる男をにこやかに迎え入れようとしているように見えた。
バスを待つ間に蕎麦を食べて空腹を癒やし、土産に蕎麦粉を購入。17時30分発のバスに乗って家路に着いた。

以上

（修正・更新：2023年11月）